



“Drive@earth” (ドライブ・アット・アース)

三菱自動車工業株式会社
代表取締役 取締役社長

益子 修

三菱自動車は現在、中期経営計画「ステップアップ2010」を達成するために取り組んでいることがいくつかあります。その中でも、最も重要なことは、絶えず変化する社会の要請に応えながらも、独自の個性を持ったブランドとして、社会との強い絆を作ることだと考えています。そのため、当社では、このたび、三菱自動車の目指す未来を端的に表現する新たなコミュニケーションワードを策定しました。

“Drive@earth” (ドライブ・アット・アース) これは、「クルマを通じて、人・社会・地球との共生を目指し、走る喜びと地球環境への配慮を両立させた独自のクルマづくりに取り組む。」という当社の想いを示した言葉です。

また、その意味するところは、「三菱自動車のクルマは、「地球を走る、地球と生きる」をテーマに、地球環境に配慮しながら、地球上のさまざまな地域のお客様に走る喜びを提供すること。」であり、社会との絆への私たちの想いを込めたものです。

三菱自動車は、いままで、当社のフラッグシップカーである高性能4WDセダン『ランサーエボリューション』とともに進化し続けてきた独自の四輪駆動システムや、世界一過酷なラリーといわれるダカールラリーなどのモータースポーツを通じて、耐久性・走破性向上のための技術を追求め、「走る喜び」「確かな安心」の具現化を目指してきました。

今後は、これらの独自技術にさらに磨きを掛け、「走る喜び」「確かな安心」を追求すると同時に、「地球環境への配慮」を一層高いレベルで両立させたクルマづくりを推進してまいります。

「地球環境への配慮」という面では、当社は現在、2006年度に策定した「環境行動計画2010」に基づいて、グローバルな連結環境マネジメント体制の整備や、次世代の環境基幹技術の開発を推進しています。これまで、MIVECエンジンの搭載、車体の軽量化など、燃費向上、CO₂排出量削減を目的としたさまざまな環境対応技術の開発を行ってきました。これら従来技術の改良に加え、まずディーゼルエンジンについては、国内で10月に再び『パジェロ』に搭載した一方、欧州では次世代クリーンディーゼルエンジンの商品化を目指します。更に、エタノールでも走行可能なFFV (フレキシブル・フューエル車) はすでにブラジルで販売していますが、今後、販売地域を拡大していきます。また、ツインクラッチ方式による素早い自動変速と高効率な動力伝達による優れた燃費を両立させたトランスミッション、「Twin Clutch SST (Sport Shift Transmission)」をすでに『ランサーエボリューション』に搭載していますが、この技術の車種展開も拡大していきます。更に、走行中にCO₂を排出しない究極の環境対応車と言われる電気自動車の早期市販化に

も全力を注いでいます。新世代電気自動車『i MiEV (アイミーブ)』は、現在、日本では複数の電力会社と実用化のための実証走行試験を行なっていますが、グローバル展開に向け、欧州、北米でも同様の試験を計画するなど、その実証試験の範囲を拡大していきます。

当社の電気自動車の開発の歴史を振り返ってみますと、今から約40年前の1969年に、電気自動車の開発をスタートさせました。

そもそも電気自動車自体の歴史は古く、自動車の発明直後にはすでに登場していたと聞いています。しかし当時の技術ではモーターの出力が低いこと、また航続距離が短かったことなどから、内燃機関を動力源とする自動車に淘汰されてしまいました。その後、自動車の排出ガスによる大気汚染が大きな社会問題となった1970年代、そして化石燃料の枯渇問題や光化学スモッグ防止に向け米国カリフォルニア州で電気自動車の導入が義務化された1990年代にも電気自動車が注目される時期がありましたが、このときも航続距離や信頼性などから実用化の道は険しく、普及するまでには至りませんでした。

そして、地球温暖化、原油価格高騰が差し迫った問題となった現在、再度注目を集めています。現在の電気自動車は、今までのものと比べ、二つの技術革新があります。一つは、大きな壁であった航続距離の課題について、材料技術の進歩により小型・軽量・大容量で、信頼性も高いリチウムイオン電池が開発されたことです。これにより、車両重量や航続距離の面で著しく向上しました。

二つ目は、小型で高出力な永久磁石式同期型モーターが開発されたことがあげられます。



車両レイアウト図

私も、都内の移動には、社用車として積極的に電気自動車を使い、実証試験の一役を担っておりますが、静かで力強い“走り”の電気自動車の実用化は、すぐ目の前まで来ていると実感しております。

当社は、電気自動車の開発に着手してから40年近くの歳月を経てようやくここまで漕ぎ着けた訳ですが、このように一つの技術が確立されて商品として結実するためには、それを必要とする社会ニーズと技術的なブレークスルーの両面が合致することが必要となります。加えて、夢を持ち続け、電気自動車を必ず実用化するという強い意志を持って開発に取り組んで来た、技術への情熱を忘れる訳にはいきません。

三菱自動車は、今、地球環境への貢献を企業経営の最重要テーマとして取り組んでいます。“Drive@earth” (ドライブ・アット・アース)のもと、「人とクルマ、社会とクルマ、そして地球とクルマがいつまでも永く共生すること。」の実現を目指し、世界中のお客様に向けて、情熱を持って社員全員が知恵と創造力を結集することで応えていきたいと思っております。



i MiEV (アイミーブ)